

バンドン精神の今日的意義を確認する

世界は新しい時代の頂点に立っているように見えるが、グローバル・サウスはなお過去 500 年間の悪夢からの目覚めを必要としている。

ウォルデン・ベロ、シャルマリ・ガッター

Znet 2025 年 5 月 7 日

<https://znetwork.org/znetarticle/affirming-the-spirit-of-bandung-today/>

1955 年 4 月のバンドン会議は、グローバル・サウスの歴史の中で神話的な地位を獲得した、その欠点もまた多く指摘されてきた。その中には、サハラ以南のアフリカの指導者たちにたいする過小評価や、ラテンアメリカの指導者の不在、また冷戦時代の地政学的な対立が会議に浸透したことなどがある。さらに、ポストコロニアル世界の人民間の相互作用の主要な単位としての国民国家が正当化されたため、連帯を表現し活用する他の手段を損なったこともある。また 1962 年のヒマラヤ山脈でのインドと中国の国境戦争のような残念な余波もあった。

これらの主張は修正主義的だとの議論はあっても間違いなく重要だが、それにもかかわらず、「バンドンの重要性」は神話的な地位を獲得した。それは、会議録の表現は完璧とは言えなかったかもしれないが、台頭するグローバル・サウスの人々の間でポストコロニアルの団結の精神が会議に充満していたからである。さらに、バンドンのこの精神は、多くの政治活動家たちにその初心を再現するよう絶え間なく刺激を与えたため、第三世界の連帯を継続的に表明しないことへの不満につながっている。バンドンの精神を祝うことは、単にアジア・アフリカ会議から 70 周年を記念するだけでなく、その原則と理想に忠実であることが今日何を意味するかを確認することである。

バンドン文書は主に反植民地主義文書であり、グローバル・サウスの非常に多くの政府と人々が、ガザとヨルダン川西岸地区での大量虐殺と入植者植民地主義と闘うパレスチナの人々を支持しているのは、注目にあたいするし心強いことだ。この点で模範的なのは南アフリカの役割で、国際司法裁判所にイスラエルの大量虐殺の告発し、他の 31 の政府の正式な支援を受けて追求している。

バンドンとベトナム

バンドン建国 70 周年の 2025 年 4 月は、ベトナム社会主義共和国統一 50 周年でもある。ホーチミン市でのここ数日間の祝賀会は、サイゴンの大統領官邸の門を突き破る人民軍の戦車の象徴的な写真や、米国大使館の屋上から協力者がヘリコプターで避難する象徴的な写真など、アメリカ帝国の決定的な敗北のイメージを呼び起こした。振り返ってみると、ベトナムでの敗北は前世紀にアメリカの権力に加えられた決定的な打撃であり、アメリカはそこから実際に立ち直ることはなかった。確かに、帝国は 2001 年と 2003 年にそれぞれアフガニスタンとイラクへの侵攻で第二の風を吹き飛ばしたように見えたが、その幻想は、2021 年に米国とアフガニスタンの部下たちがパニックに陥り、カブールから恥ずべき撤退したことで打ち砕かれ、そのイメージは数十年前のサイゴンでの大失敗の記憶を呼び起こした。

ベトナムとアフガニスタンでの敗北は、帝国の軍事的大失敗の劇的な終焉であり、それは世界と帝国の中心地の両方で大きな反響を呼び起こした。バンドンは、「すべての国の主権と領土保全の尊重」と「他国の内政への不干渉または不介入」を主要な原則として強調した。この原則を破ることがどのような結果になるかを米国とその同盟国に学ばせるには、ベトナムと中東、そして世界の他の地域の人々からの断固たる抵抗が必要だったが、それはグローバル・サウスの何百万人もの命を犠牲にした。そして、攻撃的な西洋の介入主義の時代が終わったかどうかは決して定かではない。

発展と反革命

バンドン以来のグローバル・サウスとグローバル・ノースの間の闘争の経済的側面は、それほど劇적ではなかったかもしれないが、まさしく重要であった。

そして同様に曲がりくねったものだった。バンドンに続いて、1961年にベオグラードで非同盟運動が設立され、G77が結成され、国連貿易開発会議(UNCTAD)が設立された。世界経済の構造変化を求めるグローバル・サウスのたたかいの盛り上がりは、1974年の新国際経済秩序(NIEO)の呼びかけで最高潮に達しました。

そこで反革命が始まった。1980年代初頭の第三世界の債務危機を機に、世界銀行と国際通貨基金を通じて、構造調整がグローバル・サウスに押し付けられ、国連多国籍企業センターのような国連機関は廃止されるか、あるいは牙を抜かれ、世界貿易機関(WTO)が関税と貿易に関する一般協定(GATT)に取って代わり、UNCTADを脇に追いやった。「多国間主義の王冠の宝石」であるWTOは、グローバル・ノースに利益をもたらす貿易ルールだけでなく、知的財産権や投資、競争、政府調達での反開発体制に、グローバル・サウスを従わせることを意図していた。

国連のレトリックによって約束された「開発の10年」が約束された代わりに、アフリカとラテンアメリカは1980年代と1990年代に失われた数十年を経験し、1997年には、国際通貨基金(IMF)が押しつけた欧米の投機的資本と緊縮政策によって大規模な地域金融危機が引き起こされ、「アジア経済の奇跡」を終わらせた。

ほとんどの政府はIMFと世界銀行の構造調整プログラムを提出したが、アルゼンチン、ベネズエラ、タイなど一部の政府は国民の支持を受けて首尾よく抵抗した。しかし、南北間の経済戦争の主な分野はWTOだった。南の諸国政府と国際市民社会が協力して、シアトルで開催された第3回WTO閣僚会議で、いわゆるシアトル・ラウンドの採択を挫折させた。その後、2003年にカンクンで開催された第5回閣僚会議では、開発途上国政府が劇的な退場を行い、WTOはそこから立ち直ることはなかった。実際、WTOは、世界貿易と経済自由化をめざす北の世界の主要機関としての有用性を失った。

中国とBRICSの台頭

BRICS(ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカ)結成の基礎になったのは、WTOにおける共通の利益と北の世界のイニシアティブに協力して反対することだったが、2010年代には、米国が支配する多国間システムの代替極として徐々に浮上した。

BRICSのアンカーは中国だった。20世紀前半の50年間の闘争で帝国主義を打ち負かしてきた中華人民共和国は、安価な労働力を提供する見返りに、巨額の外国投資と、最も重要な先端技術を求め、自信を持って西側諸国との悪魔の取引に入った。中国の労働力を搾取して超過利益を求めた西側資本は、この取引に同意したが、その恩恵を得たのは中国であり、急速な工業化のプロセスに着手し、今日では世界一の経済大国となった(もちろん、どの指標を使用するかにもよる)。中国の台頭はグローバル・サウスに大きな影響を与えた。中国は開発に莫大な資源を提供しただけでなく、あるアナリストが言うように「世界最大の開発銀行」になった。西側が支配する金融機関や西側債権者への依存を減らすことで、南の世界の行動主体が戦略的選択をするための政策余地も提供した。

中国の超工業化の裏側は、米国とヨーロッパの脱工業化であり、2008年の世界金融危機と相まって、これは米国の覇権の深刻な危機につながり、トランプによる敵味方をわきまえない貿易戦争、米国に付け入る同盟国への非難など、最近の事件を引き起こした。彼はWTOや米国が支配する多国間システム全体を放棄し、縮小を続けながら、米国の経済的および軍事的資産を西半球に再集中しようとしている。

これらすべての展開によって事態は流動化し、北と南の間の闘争のバランスが後者に傾いている。

今日のグローバル・サウスのレトリックと現実

しかし、バンドンの精神に忠実に従ってそれを促進するためには、地政学的および地経学的なバランスをグローバル・サウスに傾ける以上のことが必要である。バンドン宣言は第一原則として、「基本的人権の尊重と、国連憲章の目的と原則の尊重」を促した。ネルー、ナセル、周恩来はバンドンで輝かしい役割

を果たしましたが、彼らが代表する政府はこの原則に忠実であり続けたと言えるだろうか。今日のインドは、イスラム教徒を二級市民と見なすヒन्दゥ教の民族主義政府が支配しており、エジプトの軍事政権は甚だしい人権侵害を行っている。北京もウイグル人の強制的な文化的同化を行っている。軍事政権がジェノサイドに関与しているビルマや、何十年にもわたる暴力的な内戦が続いているスリランカのように、歴史的な会議を始めたこれらの政府や他の国々による行為が、この原則とどう一致するか、理解するのは難しい。

実際、グローバル・サウスのほとんどの国は、権威主義的であろうと自由主義的な民主主義体制であろうと、自国民を抑えこむエリートによって支配されている。貧困と不平等のレベルは衝撃的である。ブラジルのジニ係数は 0.53 で、世界で最も不平等な国の 1 つになっている。中国の 0.47 という数字も、貧困削減が目覚ましい成功を収めているとはいえ、大きな不平等を反映している。南アフリカでは、ジニ係数は驚異的な 0.63 であり、人々の 55.5% が貧困ライン以下で生活をしている。インドでは、過去 30 年間で所得が二極化しており、億万長者やその他の「富裕層」が大幅に増加している。

先住民コミュニティ、労働者、農民、漁民、遊牧民コミュニティ、女性など、グローバル・サウス全体の膨大な数の人々は、経済的に権利を奪われており、フィリピン、インド、タイ、インドネシア、南アフリカ、ケニアなどの自由民主主義国でも、彼らの民主主義への参加は、定期的な、しばしば無意味な選挙運動で票を投じることに限定されている。「一帯一路」構想や自由貿易協定などの南・南投資・協力モデルは、国の発展を目的とした土地、森林、水域、海域の奪取や天然資源の採掘を頻繁に伴う。地元住民(その多くは先住民族)は、生計手段と領地、先祖代々の土地を奪われ、法的手段や司法へのアクセスがほとんどなく、自国で育った植民地主義と反革命の亡霊に悩まされている。

バンドンは、先に述べたように、国境を越えた国家間の関係を主要な手段として国民国家を制度化しました。もし、汎アフリカ運動や女性運動、労働運動、農民運動のような世界的な運動の代表が 1955 年の会議に参加していたら、バンドン後の世界で制度化された国境を越えた連帯は、おそらく、横方向の圧力を通じて、エリートによる各国政府の支配を打ち消し、緩和することができただろう。民族自決を提唱し、国家の境界内での資源、機会、富の再分配を提唱

する人々も、おそらく破壊者や国益への脅威として悪魔化され、迫害されることはなかっただろう。

この世界的な移行の現在において、古い西洋が支配する多国間システムが不可逆的な崩壊に陥るにつれて、新しい多極化という言葉は新しい多国間機関を必要とするだろう。特にグローバル・サウスの大国にとっての課題は、支配的な大国が国連、WTO、ブレトンウッズ体制の機関を利用して、自分たちの意志と選好を大多数の国々に間接的に押し付けただけの古い西洋支配システムのレプリカを作り出すことではない。BRICS や他の代替の多国間システムは、権力と階層の古い秩序の複製を避けることができるだろうか。正直なところ、グローバル・サウスの最も強力な国々の現在の政治経済体制は、自信を呼び起こすものではない。

バンドンと続く資本主義の亡霊

バンドン会議の時点では、世界の政治経済はより多様だった。ソ連が率いる共産主義圏があった。国家民主主義から社会主義への移行を推進する中国があった。共産主義と資本主義の間の第三の道を模索していたインドのような中立主義国家があった。その多様性はグローバル・ノースとグローバル・サウスの両方が何十年にもわたって新自由主義的変革を遂げたため、消え去った。おそらく、新しい公平な世界秩序に対する最大の障害は、すべての国がグローバル資本主義のシステムに組み込まれたままであり、そこでは利益の追求が依然として経済拡大の原動力であり、大きな不平等を生み出し、地球に脅威をもたらしているという事実だ。グローバル資本主義のダイナミックな中心は、過去 500 年間で、地中海からオランダ、イギリス、アメリカ、そして今やアジア太平洋へと移動してきたかもしれないが、資本主義は地球の最果てまで浸透し、征服した地域に深く定着している。資本主義は、有名なマニフェストのイメージを借りれば、固体のすべてを空中に溶かし続け、社会内と社会間の不平等を生み出し、地球と人間社会の関係を悪化させ、実際に終末にする恐れがある。

私たちは、経済的、社会的、政治的関係のポスト資本主義システムを生み出さずにバンドンの願望を叶えることができるだろうか。偏見、人種差別、家父長制、権威主義の暴力から解放され、地球を破壊する終わりのない成長への奴隷

制から解放され、あらゆる多様性と強みを持つ人々が平等に参加し、恩恵を受けることができるシステム。それが問題であり、課題であり、バンドンの「やり残した事業」だ。バンドン精神の基礎を形成する 10 原則は、国際人権法に反映されているが、特定の地政学的、地経学的、人種的、ジェンダー化された利益に奉仕するよう皮肉にも操作されてきた。したがって、私たちの時代がバンドンの精神に忠実であるためには、バンドンの限界を超える必要がある。バンドン・スピリットは、反植民地主義、反帝国主義、平和、正義、自決、連帯の理想を意味し続けており、植民地主義からの解放と帝国主義への抵抗のための闘争の最前線に立ち、自由のために命を捧げたアジアとアフリカの人々によって形作られた。パレスチナ、西パプア、カナクなどの重要な例外を除いて、植民地占領からの独立が達成されたにもかかわらず、資本主義の搾取と搾取主義、そして資本と権威主義国家の間のファシスト同盟からの自由を求める農村部と都市部の労働者階級の闘争は続いている。

「歴史は悪夢であり、そこから目覚めようとしている」と、有名な小説の登場人物が宣言している。新しい秩序の約束とともに世界は新しい時代の入り口に立っているように見えるかもしれないが、グローバル・サウスはまだ過去 500 年間の悪夢から目覚めなければならない。資本主義の誕生が、グローバル・サウスの植民地支配の始まりをも見たのは偶然ではない。ポスト資本主義の世界秩序の到来によってのみ、悪夢は本当に終わるだろう。

筆者のウォルデン・ベロはフィリピンの国際経済アナリスト、評論家。現在ニューヨーク州立大教授、シャルマリ・ガッタルとともに、バンコクを拠点とする「フォーカス・オン・グローバル・サウス研究所」の上級研究員として活動している。

【翻訳チェック 田中靖宏】